［広報たかつき］
令和３年　No.1398

たかつき DAYS

5

知る　広がる　好きになる

夢中になれば、世界も広がる。
つきつめるうち今に至る
高槻の〝はまりびと〟

10 運動を始めよう
18 新型コロナワクチン接種
21 令和3年度市職員を募集

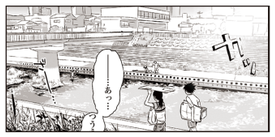
はまりびと・その1

マンガ家

大島千春さん

画力と表現力の合わせ技で生み出されるマンガは、さまざまな物語で読む人を楽しませてくれる。
燻製をテーマにした作品でブレイクしたマンガの舞台は、実は高槻だった。

想像だけでは描けないから
高槻での生活も大切な要素



JR高槻駅前、芥川桜堤公園など、おなじみのスポットが作中風景に登場することも

©大島千春／コアミックス

〝マンガっ子〟とは違う独創的な演出力

大学1回生で描いた作品でデビューした大島さん。でも、マンガとの出合いは高校時代、描くのが好きだった絵で自立する道を模索していたときだった。「読んでみたら衝撃を受けて……。音もないのに映画のようでもあるおもしろさにほれ込んでマンガ学部に進学し、描き方をゼロから学びました」。

演出や構成、セリフ回しにも定評ある大島さんの作品は、ていねいに描かれる独特の世界観が人気を呼んでいる。「マンガをまったく読まずに育ったのが逆に良かったのかも」と大島さん。セリフが得意なのは、良くも悪くも、人との会話でどんな思いをしたのかよく覚えているから。「考え過ぎだとよく言われますが」と笑う。

大ヒットした『いぶり暮らし』は、「出版社から燻製料理ができるまでの時間を会話で演出できる作家さんを探していると言われ、『私しかいないでしょう!』と手を挙げたんです」。

マンガのベースは実体験 燻製にはまる過程が作品に

もともと料理が得意な大島さんだが燻製は未経験。作品を描くために道具や本を買うところから始めたという。「燻製って調味料と違って、食べるまで味の想像がつかないんです。予想を超えたおいしさになるのがおもしろくて、完全にはまりました」。イカ釣りのシーンを描くときには、忙しいなか実際に海まで行ったのだそう。「疲れて海を眺めたり、ほかの釣り人と語らったりする心情や様子って、想像だけでは描けません。だからマンガを通じて、高槻での私の暮らしも垣間見えると思います」。

「夢中になれるものを見つけるには、まずはなんでも試してみること」を体現する大島さんのことばは、改めてその大切さを実感させてくれる。

大島千春さん
大学在学中に小学館新人コミック大賞青年部門大賞受賞でデビュー。卒業後、コミックゼノンマンガオーディション準グランプリ受賞。代表作は『いぶり暮らし』

単行本『いぶり暮らし』全9巻と『綿谷さんの友だち』全3巻（コアミックス）

大島さんオススメの燻製（くんせい）とメニュー

私のマンガがきっかけで燻製にはまったと言われるとうれしいです

そのままでもおいしいけれど、料理に使えば食生活がぐっと豊かに。
『いぶり暮らし』のページと合わせてご紹介！

イチ押しは牡蠣！

シーズンになったらぜひ！

炒めて燻してオイル漬けにすれば、使い勝手バツグン。オイルも全て使える。炒飯、パスタなどバリエーションもいろいろ

食材やチップを変えて楽しんで

燻製のキホン

必要なのは、鍋、フタ、網、アルミホイル、燻製チップ。鍋は燻製用でなくても中華鍋のように深さのある鍋ならOK。アルミホイルを敷いた鍋にチップを入れて強火で熱し、煙が出てきたら弱火にして、網、アルミホイル、食材を順に置いてフタをし、弱火で10～15分。煙がなくなるまで待てば完成。

初めてなら缶詰が手軽！

煮玉子やプロセスチーズ、ソーセージも失敗しにくい

ミンチの燻製も幅広く活用できて便利。脂が出るのでバットに入れて

帆立貝柱は塩コショウとパルメザンチーズをかけてグリルで焼いて、スパムはサンドイッチに。もうひと手間でもっとおいしく

インスタグラム高槻市公式アカウントで「たかつきDAYS」5月号特集のこぼれ話を配信中!

はまりびと・その2

バイオリニスト

富樫美玲さん・富樫音葉さん

〝楽器の女王〟とも評されるオーケストラの花形、バイオリン。
小学6年生の双子バイオリニストが奏でる音楽が、今、クラシック音楽界とファンの注目を集めている。

ケンカはしょっちゅう。
でもデュオは楽しい!

富樫美玲さん（左）**音葉さん**（右）
ともに3歳からバイオリンを始め、数々のコンクールで上位入賞を重ねる。現在は日本フィルハーモニー交響楽団コンサートマスターでもある田野倉雅秋氏に師事。デュオとしての招待演奏も多数

全国大会で1位と2位！ふたりだからがんばれた

父がアマチュアのチェロ奏者、母がプロバイオリニストで教室の指導者という富樫美玲さんと音葉さん。5歳でコンクールに入賞、昨年はクラシック音楽家の登竜門といわれる全日本学生音楽コンクールのバイオリン部門小学校の部で1位2位を独占した。

「バイオリンは気持ちがポカポカするようなきれいな音」と音葉さんが言えば、「たった4本の弦で低い音から高い音まで、いろいろな音が出せる」と美玲さん。奏でられる音色や表情の多彩さとともに、合奏でも主旋律を担うことが多いのも魅力なのだとか。

コンクールでは、出場ごとに順位が入れ替わるなど、抜きつ抜かれつの良きライバル。「自分だけできなかったときは悔しいけど、教え合ったり励まし合ったりできるし、双子で良かったです」。音葉さんのことばに、「ふたりでいるからやる気も出る」と美玲さんもうなずく。

昨年、母の友人主催の「オータムコンサート」にゲスト出演。人前での演奏は、新型コロナの影響で公演が軒並み中止になって以来だったこともあり、舞台に立つこと、聴いてもらう人がいることのありがたみを改めて親子で噛み締めたとか

さまざまな場所で演奏

5歳でコンクールに初出場、初入賞して以来、全国レベルの大会で着実に実力をつける一方で、6歳で関西フィルハーモニー交響楽団と共演。一昨年はテレビ「題名のない音楽会」にも出演し、今年は初の単独コンサートも行った

平日は4時間、休日は6時間ぐらい練習。「遊んでいる友だちがうらやましいけど、努力の分だけ良いことも大きくなる」

弾き方次第でいろいろ表現できる
バイオリンが大好き！

音楽家が育ちやすい土壌がある高槻のまちで

イベントなどへの出演も多い。自然と聴き入ってしまう見事な二重奏に、小学生の面影はない。「双子だから息も合いやすいんです」「テレビなどで東京に行けたりするとうれしいし、もっとうまくなりたいってがんばれます」と口をそろえるふたり。良い成績が取れた時のうれしさと、豊富な経験ができる楽しさでさらに上をめざしているのがわかる。

ふたりが育つ高槻について、母・美音子さんは「バイオリニストの方も多く、コンサートやオーケストラの活動も盛ん。クラシック音楽をやるには最適なまち」と語る。

「目立ちたいからソリストがいい。将来はバイオリンの先生になりたい」と言う音葉さんと、「みんなと合わせるオーケストラがいい。まだ決まっていないけど将来も音楽に関することがやりたい」という美玲さん。めざす方向は少し違うけど、バイオリンを好きな気持ちはこれからも続きそうだ。

全日本学生音楽コンクールで入賞したごほうびとして家族の一員となったペットに夢中のふたり。運動も大好きで、練習の合間にはバドミントンやミニサッカーなども

音葉さんは
小さな折り紙も
得意

はまりびと・その3

粘菌愛好家

片岡祥三さん

身近に生息するミクロな生物への興味は、解明されていない謎もたくさんあるマニアックな世界の入り口だった。
もっと知りたい! 伝えたい! と、どんどんのめり込んでしまった〝粘菌〟の魅力とは。

知るほどに不思議で おもしろい粘菌の世界

6年前、京都大学で開かれた「ミクロ生物フェスティバル」の展示。それが粘菌との出合いだった。当時小学1年生だった長男が粘菌を飼いたいと言いだし、会場の研究者に聞くと、朽ち木や落ち葉がある環境ならどこにでもいると言う。そこから城跡公園（現 高槻城公園）、摂津峡、今城塚古墳公園など、さまざまな場所を探し回ったが見つからない。そして2カ月後、「高槻森林観光センターの裏山でようやくイタモジホコリの変形体を見つけ、飼い始めたんです」。

子どもの質問に答えるため勉強を重ねた片岡さんは、調べるほどに謎多き生き物だとわかり、どんどん没頭していった。「エサの種類や飼育温度、下に敷くキッチンペーパーの交換頻度など、試行錯誤を繰り返し、ようやく安定して育てられるようになりました。わからないことを知ろうとするのは、人間の本能だと思います」。

自然が身近な高槻は 粘菌にとっても好環境

高槻は、都会のすぐそばに自然がある、バランスのいい環境。一度コツをつかむと、いろいろな公園で粘菌を見つけられるようになったという。今では大学や博物館、高校から質問されたり、研究用に分けてほしいと言われたりするまでに。「こんな不思議でヘンテコで美しい生き物が身近にいるのに、知らないのはもったいない」と、片岡さんは語る。

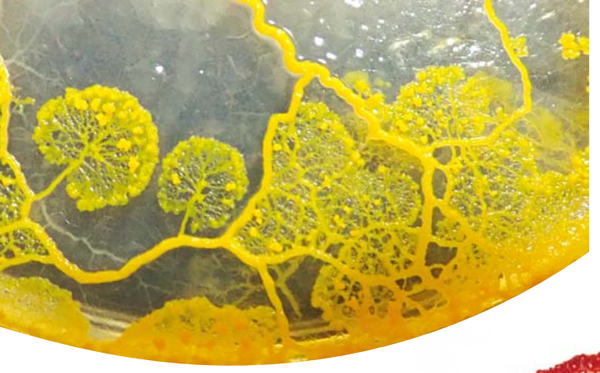
生物学はもちろん、医学や薬学、環境学など、粘菌はいろいろな分野の入口にもなるのだそう。「粘菌の動きをプログラミングしてカーナビなどに応用する情報工学やバイオテクノロジーなどにも派生しますし、アートや写真の題材としても優れています。知れば僕たちのように、はまる人もいるはず」。可能性に満ちている粘菌。多くの人に、とくに子どもたちにはぜひふれてもらいたいと、片岡さんは願っている。

高槻や大阪市内の小学校では、顕微鏡や粘菌を持ち込んで紹介する特別授業も開催

原作したマンガ『粘菌ロンと楠公少年』と共著『ねんきんのほん』。長男・連くんの『粘菌観察ノート』にも定評がある。平成29年の第9回国際変形菌類分類生態学会議ではマンガをテーマにしたポスター発表、国立科学博物館や和歌山県立自然博物館、南方熊楠記念館などでも展示を実施

片岡祥三さん
元料理人で、トロンボーン奏者。音楽イベントや人形劇の企画・制作・監督・脚本なども手がける。粘菌を子ども2人と飼育し、今では粘菌界（?）のキーパーソンに。関連グッズを扱う「マメホコリ工房」も運営

追求するおもしろさが
日々の暮らしに楽しさをくれた



変形体

性別の違う粘菌アメーバ同士がひとつになり、大きく成長した姿が「変形体」。単細胞なのに脳があるかのように振る舞い、大きいもので1mを超える。色とりどりで、まるでアート作品のような美しさ!

幅広い世代に粘菌の魅力を広めようと、粘菌グッズを制作・販売する工房をオープン。たくさんの"ママ友"も作品づくりを支える

そもそも粘菌とは?

動物のようにエサを食べる変形体から、キノコのように胞子をつくる子実体への変化をライフサイクルとする不思議な生き物。陸にすむアメーバの仲間と見られている

子実体

エサがなくなり環境が悪くなると変形体から「子実体」に変身。胞子をつくり、風に乗せて環境の良いところに着地させ、粘菌アメーバを生みだす。いろいろな形や色があり、森の宝石とも呼ばれている

粘菌がよく見つかる6〜11月頃になると子どもたちと採集へ。ママ友と連れ立って観察会をすることも

自宅では約50ケースの変形体を飼育。毎日の夕食後がお世話タイム。エサをあげたり、掃除したりするうちに、体調がわかるようにもなったのだとか